

フェルトのハンマー

シユウはピアノの調律師です。

ちようりつし しごと

ちようりつし

調律師の仕事は、ピアノの弦の調整だけではありません。ピアノ

なか そうじ

ねいろ けんばん

げん ちようせい

ぶひん こうかん

の中を掃除したり、音色や鍵盤のタッチをそろえたり、部品の交換や切れてしまった弦の張り替えもします。いわばピアノのお医者さま。

しごと

かた

ちようりつし

すこ

仕事のやり方は、調律師によって、ピアノによってもそれぞれ少し

ちが

いつけん

おな

み

じつ

いちだい

ずつ違います。ピアノは一見どれも同じように見えますが、実は一台

いちだい

びみよう

ちが

ひと

かお

ひとりひとりちが

こえ

ほんとう

一台微妙に違うのです。人の顔が、一人一人違うように。内緒ですが、シユウはピアノと話が出来ます。ピアノの声が本当

ないしよ

はなし

でき

に聞こえるのです。

シユウが鍵盤に触れながら耳を澄ますと、ピアノが話し掛けてきます。

ピアノの友達だっています。

今日の仕事は、その友達のピアノの家です。

「ああ、いらつしやいませ。さあどうぞ」

訪れた家の奥さんは、どこか落ち着きのなさを漂わせていました。

笑ってはいるのですが、その微笑みはなんだかぎこちなく、瞳は、はるか遠くを見つめているようです。

「失礼致します」  
しつれいいいた

シユウは玄関で靴をそろえてから、案内された部屋に入りました。

磨きこまれた黒いアップライトピアノが、品よくシユウを見つめて

いました。明るい部屋では、窓からの直射日光もクーラーも直接は

ピアノに当たらず、湿度もちょうどいいくらい。ピアノにとって最適

な環境です。

「わたくし、お部屋で休ませていただきますわ。近ごろ夜あまり眠れ

なくて。何かあったらとなりの部屋に声をかけてくださいね」

そういうと、奥さんは部屋を出て行きました。

「さて、仕事に取りかかるとするかな」

シュウはピアノのふたを開けました。高い音から順に弾いていきます。

ピロリロリロリロデイロデイロデイロ……

鍵盤に触れながら、ピアノに話しかけます。

「こんにちは。調子はいかが？」

「まあ、シュウさん、お久しぶり。

ピアノは、若い娘の声でうれしそうに笑いました。

「元気ですわ。とても快適にすごしておりますのよ。でも……

ピアノはそういうと、ほうつと上品にため息をつきました。

「こちらの奥様、つらい思いをなさったのです。それからまだ立ち直

つてなくて。

「何かあつたの？」

—ええ。奥様、おなかに赤ちゃんがいたのです。ですが、二ヶ月前におなかの中で死んでしまったのです。もう、いつ生まれてもいいと言われていましたのに。

ああ、それで奥さんはどこかうつろな感じなのだ、とシユウは思いました。

—本当に残念でしたわ。奥様なら、必ずいいお母様になると信じておりましたのに。ですからわたくし、なんとかおなぐさめしたくて、がんばっていたのですけど、うまくいなくて。

「そうか。どれ、みてみよう」

シユウは、一番上の蓋と、上前板（正面の板）を開けました。

持ち主に大切にされているピアノです。ホコリもたまっていますし、部品を交換する箇所もなし。けれども思った通り、弦の張りにはらつきがあります。

「かわいそうに、君もずいぶん心を痛めたんだね。いま直してあげる。少し明るい音に調整しよう」

「あの、出来ればちよつと違う感じにお願いしたいのですが。」「え、どうして？」

「以前、奥様がわたくしの前でこんなことをつぶやいたことがあった

のです。『なぜ、私はおなかですくのかしら。なぜ、こんなにゲラゲラ笑わらってられるの？あの子こがいなくて、すごく苦くるしいはずなのに……。私わたしは心こころの冷つめたい母親ははおやなんだわ』と。でも、奥様おくさまは、決けつして心こころの冷つめたい方かたではありませぬわ。そのことは、わたくしが一番いちばんよく存ぞんじておりますもの。

ピアノにも目めがあるとなれば、その思おもいつめたようなまなざしが、シユウには見みえるようでした。それほど真剣しんけんな声こえをピアノはしていたのです。

―わたくしは人間にんげんではないのでよくわからないのですが、人間にんげんというのはどうやら、あんまり悲かなしいと心こころが固かたまってしまつて動うごかなくな

るときがあるようです。今の奥様はそういう状態なのですわ。わたくしは、そんな奥様の心に静かに寄り添っていたいと思うのです。でもこんなバラバラな音で、どうやって奥様をなぐさめる事ができるのでしょうか……

ピアノの声は今にも泣きそうでした。

「君の気持ちはよくわかったよ。なんとかかやってみよう」  
シユウは微笑みました。

ピアノの持ち主の奥さんは、となりの部屋で横になっていました。もう何日も眠れない日が続いています。頭の奥がいつも張りつめ



ていて、そのくせ心こころがどこか遠くへ行いってしまっただよ様な感かん覚かく。す  
べてに現実味げんじつみが感かんじじられないのです。

調律ちようりつの作さ業ぎようの音おとが聞きこえてきます。

ボーン

音おん叉さの音おとが、響ひびきました。

調律ちようりつをすとる時とき、シユウはチユーナつかーを使つかいません。音おん叉さと自じ分ぶんの

耳みみとで、探さぐるようおとに音おとを確たしかめたしていくのが、シユウのやかり方かたです。

（昔むかしかたしぎの職人しよくにんさん、か。まだ若わかいのに）奥おくさんはぼんやりそう  
考かんえがました。

ポーン、ギリギリ、カタツ。ポーン、ギリギリ、カタツ。ポーン、

ギリギリ、カタツ。

（ピアノのキイを押しては、チューニングハンマーでピンを締めている音だわ）

もしも奥さんが作業をそばで見たら、シユウがチューニングハンマーと腕相撲をしている、とでも思ったかもしれません。

単調な作業の音が、いつまでも続きます。

そのうちに、奥さんの耳に、調律の作業とは違う別の音が聞こえてきました。

ポーン、ギリギリ、カタツ。うふふ。ポーン、ギリギリ、カタツ。

うふふ。ポーン、ギリギリ、カタツ。うふふ。きやはは……

(あれは、何かしら。子供の……笑い声?)

なんて楽しそうな声でしょう。聞いているとなんだか幸せな気持ちになつてきます。

ふと、言いようのない悲しみが胸に迫ってきて、子供を亡くしてからたぶん初めて、奥さんは涙をこぼしました。

いったんこぼれてしまった涙は、あとからあとから湧いてきました。声もなく静かに、奥さんは泣き続けたのです。

そのうちに泣き疲れた奥さんは、吸い込まれるように、やさしい眠りの中に落ちていきました。

「よし、終わおったよ」

シユウは上前うわまえ板いたを元もとに戻もどしました。

このピアノは大変たいへんなくすぐったがりてまで、音おとを調整ちようせいするのにちよつと手間てまがかかりました。

「ああ、ありがとうございます。なんだか心こころが軽かるくなったような気きが致いたしますわ。

「それは良よかった。君きみのハンマーフェルトがちよつと硬かたすぎたんだ」  
だから音おとが緊張きんちようしていたのだと、シユウは説明せつめいしました。

ピアノはフェルトのハンマーで弦げんを叩たたいて音おとを出だします。ピアノ特とく有ゆうの繊細せんさいな音おとや、壮大そうだいな豊ゆたかな表現ひようじようはこのハンマーがフェルトだか

からこそ出来るのです。いわばピアノの心。ハンマーフェルトが硬すぎる  
と、どうしてもキンキンとした耳障りの悪い音が出てしまいます。  
調律師は、その表面を削ったり、ピツカー（針）を刺したりして  
音を調節するのです。とても繊細な作業ですが、どうやらうまくい  
ったようでした。

「君も、思いつめすぎたのだね」

人間だって、時には心の奥のフェルトを針でほぐさなきゃいけな  
いこともある、とシユウは思ったりもします。

—シユウさん、わたくし歌いたくなりましたわ。弾いてくださいな。  
ピアノがねだりました。

シユウはピアノを弾き始めました。静かなパヴァーヌが、漂うように指先からこぼれていきます。

奥さんはとなりの部屋でまだ眠っています。その唇は、長い呪いから解かれたかのように、おだやかに微笑んでいたのでした。

パヴァーヌ……十六世紀頃ヨーロッパに起こった優雅な宮廷舞踊。  
終

(月長 海詩)

あき  
空カーン！

アスファルトの照り返しがまぶしい午後。ぼくは、あき かん ころろ  
ながら、学校がっこうの帰り道かえ みちを歩いてあるいた。

「ちえつ、まったくやってられない。」

きのう  
昨日、エースの座ざをはずされた。入部にゅうぶしたばかりのヒロがエースピ  
ツチャーになった。

なん  
何でだよ、そりやあヒロはコントロールはいいけど、たま  
ほうがずつと速はやい。

あいだ しあい たし  
この間の試合、確かにボロボロだったけどちよつと調子ちようしが悪わるか

っただけだっ。

エースになりたくて野球チームに入ったのに、  
控えの投手なんてま  
っぴらだ。

そんなわけで、今日は練習をさぼった。

空き缶を転がしながら、公園の近くに着いた。  
ここをつつ切ると家  
までは近い。

いつもは仲間と一緒になので少し遠回りで帰る。

「つまんねえ、もう、やめちやおうかなあ。」

缶を思い切り蹴とばした。

「あっ、まずい。」



蹴けった先さきにおじいちゃんおじいちゃんがたたつていた。

缶かんはその背せ中に命めい中ちゆうした。振ふり向むいたおじいちゃんおじいちゃんはぼくぼくををにらみつけた。

うわっ、怖こわそう。

「ごめんなさい。」

帽ぼうし子こをとつて頭あたまをささげた。

おじいちゃんおじいちゃんは、足元あしもとの缶かんを拾ひろい上あげると少すこし離はなれた空あきき缶かん入れいの

カゴかごに缶かんを投なげた。

カーン！

空あきき缶かんはカゴかごのふちふちに当あたると、おもおもいっきりはね返かえって、コロコ

口とまた、ぼくの方に転がってきた。

そんな投げ方じゃあだめだよ。ぼくは缶を拾うと、ちよつと自慢の  
投球フォームでカゴをめがけて投げた。缶はスツと吸い込まれる  
ようにカゴの真ん中に入った。

「よし！」

ガッツポーズをしてから、しまったと思った。ぶつけた後でまずい  
よなあ。

おじいちゃんは、ムツとした顔をした様に見えた。

まずいまずいとつとと帰ろう。

次の日、やっぱり練習をさぼって、公園を通りかかると、おじい

ちゃんが待<sup>ま</sup>っていた。

「勝負<sup>しょうぶ</sup>だ！」

そういうとぼくに空<sup>あき</sup>き缶<sup>かん</sup>を押<sup>お</sup>しつけた。

「えっ、何<sup>なに</sup>？」

びっくりしているぼくを無視<sup>むし</sup>して、おじいちゃんは、昨日<sup>きのう</sup>の場所<sup>ばしょ</sup>に戻<sup>もど</sup>ると、缶<sup>かん</sup>をポーンと放<sup>ほう</sup>り投<sup>な</sup>げた。

ガシャン。

今日<sup>きょう</sup>はみごとにカゴの中<sup>なか</sup>に入<sup>はい</sup>った。

もしかして、おじいちゃんあれからずっと練習<sup>れんしゅう</sup>してたんじゃないの、まあいいけどさ。

ぼくも昨日の場所まで戻って投げようとしたけど、思い直してもう少し後ろの方に下がってから投げた。ちよつとしたピッチャーのプライドだ。

「この勝負、ぼくの勝ち！」

ところが缶は大きくはずれて、かごの向こう側に落ちた。

おじいちゃんは、勝ちほこった顔をするときさつきと向こうへ行ってしまった。

待ってよ、勝ち逃げはズルいよ。

翌日、ぼくは拾った缶を持って公園に向かった。おじいちゃんが二つぼくが二つ、先に両方入れた方が勝ち。今日こそ勝負をつけてや

る。

公園こうえんに着つくと、やっぱりおじいちゃんおじいちゃんは今日きょうもいた。

「おじいちゃんおじいちゃん勝負しょうぶ！」

ぼくは缶かんを差さし出だした。

「おじいちゃんおじいちゃんじゃない、イチローだ。」

えっ、イチロー？ハイハイ、イチローね。でもイチローってピツ

チャーじゃないよね。

今日きょうはぼくが先さきに投なげた。

一つ目ひとめはみごとに入はいった。次つぎはおじいちゃんおじいちゃんの番ばんだ。

おじいちゃんおじいちゃんも今日きょうは気合きあいが入はいっていた。いつものアンダーロー

じやなくて、ゆっくりと缶かんを持った手てを高く上げたたかあ。そして後ろうしに反そり返かえった瞬間しゆんかん。

「あいたたたあ……」

おじいちゃんは腰こしを押おさえて座すわりこんだ。

「えっ、どうしたのっおじいちゃん大丈夫だいじようぶかあー。」

おじいちゃんは、ずいぶん痛いたそうに顔かおをしかめていた。

近くちかにいたおばさんと一緒いっしょにおじいちゃんを家いえまで連つれて行くい事にこと

した。家いえは公園こうえんのすぐ隣となりだった。表札ひようさつに太田おおた一朗いちろうと書かかれている。

あれっ、おじいちゃん、本ほん当とうにイチローさんだったんだ。

「あら、お父とうさんどうしたの？」

家いえの中なかからお腹なかの大きおおな女おんなの人ひとがで出てきた。

「なんでもない、ちよつと捻ひねっただけだ。」

おじいちゃんは、バツの悪わるそうな顔かおをしていた。

「腰こしを痛いためたみたいですよ。」

おばさんがおせつかいそうに言いった。

「ギツクリ腰こしかしら、何なにしてたの？」

おじいちゃんが答こたえなかつたので、ぼくも黙だまっていた。

そのときふつと、お線香せんこうの匂においがしたのでその方ほうへ目めをやると、

新あたらしい仏壇ぶつだんに黒くろいリボンおくをかけたおばあちゃんの写しゃしん真しんがあつた。

あの人ひとつておじいちゃんの奥おくさんだよね。

ぼくは、見てはいけないものを見ちやつた気がしてすぐに家を出て来てしまった。

次の日も、その次の日もおじいちゃん公園に来なかつた。  
心配になつたぼくは、お見舞いの手紙を書く事にした。

『腰は大丈夫ですか。』  
そう書いて破り捨てた。

『早く良くなれー公園で待ってる。』  
そう書いて空き缶にテープで貼り付けた。

おじいちゃんとはライバルなので、この方がきつと喜ぶと思つう。  
翌朝、登校の時おじいちゃんの家の玄関前にそつと缶を置いてきた。



それから十日くらい経ってから、ひよっこりおじいちゃんは現れた。

「待たせたな、ホレ、勝負だ。」

そういって、ぼくに缶を渡した。その顔はちよつと嬉しそうだった。

「腰、大丈夫、無理しないでよ。」

ぼくも、ちよつと嬉しかった。

でも手かげんはしないよ、ぼくが先に缶を投げる。

「えいつ！」

その瞬間、すごい声が出た。

「こら！何やってるの。」

振り返ると、怖い顔をしたおばさんが立っていた。

「そんなことしたら、危ないでしょう。小さい子にでも当たったらどうするの！」

「あつ、すみません、でも違うんです。」

ぼくは助けてもらおうと、おじいちゃんを見た。おじいちゃんは知らん顔をしてカゴのところまで歩いていくと、そこにポロツと缶を捨てた。ついでにぼくがはずした缶も拾って捨てた。

「ほら、見なさいちゃんとああやって。」

おばさんが言った。

えーっ。そりやないよ、ずるいよおじいちゃん。

「わかったの！」

「は、はい。すみません。」

そう言う<sup>い</sup>と、急い<sup>いそ</sup>でそこから逃<sup>に</sup>げ出<sup>だ</sup>した。

ということ<sup>ひ</sup>でぼくとおじいちゃんの勝<sup>しょうぶ</sup>負<sup>け</sup>は決<sup>け</sup>着<sup>ちやく</sup>がつかないままその日<sup>ひ</sup>で終<sup>お</sup>わりにな<sup>な</sup>った。

でもさ、そう<sup>も</sup>でなくともぼくはもうおじいちゃんに付<sup>つ</sup>き合<sup>あ</sup>っていら  
れなくな<sup>な</sup>っちゃ<sup>ち</sup>ったんだよ。

やっぱりぼく、野<sup>や</sup>球<sup>きゆう</sup>チー<sup>ち</sup>ムに<sup>もど</sup>戻<sup>も</sup>ることに<sup>し</sup>したんだ。ぼくがいなくち  
やチー<sup>ち</sup>ムが<sup>し</sup>ま<sup>ら</sup>ない<sup>い</sup>って皆<sup>みんな</sup>に<sup>い</sup>言<sup>い</sup>って<sup>も</sup>ら<sup>っ</sup>たし、それより何<sup>なに</sup>より  
やっぱりぼくは野<sup>や</sup>球<sup>きゆう</sup>が<sup>す</sup>好<sup>す</sup>き<sup>い</sup>って事<sup>こと</sup>に<sup>き</sup>気<sup>き</sup>が<sup>つ</sup>いたんだ、エース<sup>え</sup>じ<sup>や</sup>なく

てもね。

そんなわけだからごめんね、おじいちゃんそれから、もう年としなんだからあまり無理むりしないでね。

そのとき、おばあちゃんの写真しゃしんを思い出しおもて胸むねがチクツとした。

次つぎの日ひから、ぼくは野球やきゅうの練習れんしゅうをすごく頑張がんばった、サボってた分ぶんも頑張がんばった。

それから二ヶ月にかげつくらい経たったある日ひ、久しぶりひさに練習れんしゅうが休みやすになつたので学校がっこうの帰りかえにあの公園こうえんを通とおった。

いたいた、おじいちゃん。あれ、今日きょうは小さな赤あかちゃんを抱だっこしている。

もしかして、その赤ちゃんて、おじいちゃんの家いえにいた女おんなの人の  
お腹なかにいた子こ？

おじいちゃんは、すごく優しい顔かおで赤ちゃんをみ見ててぼくに気付きづ  
かない。

よかったじゃん、おじいちゃん。

ぼくもね、いい報告ほうこくがあるんだよ。実はじつさ、また、エースピッチャ  
ーまか任せてもらえる事ことになったんだよ。

前まえよりも球たまも速はやくなったし、コントロールもすごく良よくなったって  
監督かんとくにほめられたんだ。

今はね、前まえみたいいまに、エースじゃなきゃいやだ。なんて思おもってない

けどね、でもやっぱり嬉しいよ。

あつそうか、そんな事、おじいちゃんに話してなかったつけ。

自分、おじいちゃん**と**ぼくの勝負は、おあずけだね。

でもさ、おじいちゃん**が**その気なら、ぼくはいつでも相手になるよ。

今度は空き缶**投**げ以外でね。

おわり

(大嶺 則子)

お弁当の日 べんとう ひ

とうとう、ばあちゃんはひと言も口をきかないまま、カサを開いて ひら  
ゆつくり、ゆつくり、歩きだした。ぼくもしぶしぶ、後に続いた。 あと つづ

天気予報では一日じゅう晴れのはずだったのに、ぼくとばあちゃん てんきよほう いちにち  
が校舎を出るところになっていきなり、雨が降りだした。 こうしゃ で あめ ふ

しかも、どしゃぶり。まるでぼくの代りにバクハツしているような、 かわ  
そんな勢いだ。 いきお

思いつきり地面を叩きつけている。 おも めん たた

かえるに帰れなくて廊下で突っ立っていると、通りかかった保健室 かえ ろうか たとお ほけんしつ

の先生せんせいが、これでよかったら、とふたりぶんのカサを貸かしてくれた。

どっちも女おんなモノで恥はずかしかったけれど、そんなことを言いつてい  
る場合ばあいじゃなかった。

ぼくのアゴをひよいとあげて、

「ほれ、もう乱暴らんぼうしちゃダメだよ」

と、わかったようなテキトーなことを耳打みみうちちして、ふやけたように

ニヤニヤ笑わらったのだ。

なんだって？ ランボー？

くそーっ！ なんてこった。

みんなでかってに、ぼくをワルモノと決きめつけている。ちきしょう。



どいつもこいつも。

「カサんゝヌーならんゝ」

少し前すこしまえを歩いてあるいたばあちゃんが呆あきれたように唄うたうようによく、  
口くちをきいた。

「ナオ、だいじょうぶねえ？」

ぼくの方ほうをふり向むいてくしやつと笑わらう。

水みずたまりに当ありちらすところだった。

目めをそらしてキリキリと歯はを食くいしばった。

返事へんじなんかできそうにもない。

ちよつとでも口くちをきいたら、大おお声をあげて泣ないてしまいそうだった。

きよう やがいがくしゅう べんどうも ひ  
今日は野外学習で弁当持っ日だった。

だのに、ばあちゃんと帰ることになった。  
かえ

ばあちゃんはお父さんのお母さんだ。  
とう かあ

うちにはいまぼくとおばあちゃんしかいない。

お父さんは仕事で今石垣島に行っていてもうすぐ帰ってくるけれど、  
とう しごと いまいしがきじま い かえ

お母さんはぼくが三年生に上がるころ、家を出て行ってしまった。た  
かあ さんねんせい あ いえ で い

ぶん戻ってくることはないと思う。  
もど

そのことならもうウジウジと引きずってはいない。最初のころは  
ひ さつしよ  
参観日もそわそわしっぱなしで、授業なんかで上の空だった。  
さんかんび じゆぎよう うわ そら

それで今日のきようような日ひに弁当べんとう作つくったり、ぼくのことなで何かなと学校がっこうに  
呼よび出だされたり、ほかにもいろんな学校がっこう行事ぎようじとか父母ふぼ会かいとか、どれも  
これもばあちゃんやくめの役目やくめとなる。

今日きようは呼よび出だしだだった。けれどそのことなでムシヤクシヤしているわ  
けではななかった。

悪わるさをしたわけなでもないのに、先生せんせいがわざわざなばあちゃんやくめを呼よび出だ  
したことなに納得なっとくいかななかった。学校がっこうまでの道みちのりをばあちゃんやくめに往復おうふく  
させていることなが腹立はらだたしなかった。

ばあちゃんやくめはひひざがわる悪い。ひひざにはないつもシやくップ薬やくを貼はっている。

暑あついときなも寒さむいときなもサポなーターなはなはずなしたなことながない。

だから、通い慣れているぼくにはどうって事のない道のりだけれど、  
ばあちゃんにはかなり荷の重い、相当ナンギな距離だ。

てんぷらとさしみの店を開いているばあちゃんは普段も立ちっぱなしなのだ。ばあちゃんの作るてんぷらは評判がよくて大人気だ。

だから、一日だって休めない。

「お客さんに迷惑かけられんさーねえ」

ばあちゃんはいつも口にしてる。

店のことも家のことも丸ごとひとりでかかえているばあちゃんには一分もそうそうムダにはできない。呼び出しを食らったばっかりに、きょうのばあちゃんの大事な時間がメチャメチャつぶされてしまった。

いつたいどうしてくれるというんだ。

先生せんせいへの怒りいかは治まりおさそうにもなかった。

でももつと憎にくたらしいのはあいつだった。

そりや確たしかに、先さきに手てを出だしたことは悪わるかったと思おもっている。けれ

ど、コートなぐのほうなぐが殴なぐられて当然とうぜんのことをしたんだからな。

思おもい出だしたくもかおないコートかおの顔かおがアツプかおになつてまぶたいうっぱい浮う

かんでくる。

「ごめんねえ。ナオ」

ひっそりと、雨音あまおとにまぎれたばあちゃんこえの声こえにギョツおもとして思おもわず、

足あしがすくんだ。

「ばあちゃんにはきれいな弁当べんとうつく  
れたって？」  
わら

煙けむったようなひどい雨あめのなか、ばあちゃんの表情ひょうじょうはぼやけてはっ  
きりしない。

どうしてばあちゃんがあやまるんだ。

ばあちゃんがあやまることじゃない。

悪いわるのはコータなんだ。

すべてあいつのせいなんだ。

あんまりムシクシクして、胸むねもチクチクして、  
頭あたまも割われそうに  
ガンガンしてくる。

あいつとききたら、ばあちゃんが作った弁当をあざ笑って、まるまるひっくり返したんだ。

「シーミーじゃねーんだよ。お前こんなジジクセーもんがよく食べるなッ！」

それだけじゃない。

いつだったか、あいつが家に来たときだ。

魚くさいだの、ババーくさいだの、いいたい放題だった。アチコ

ーコーのおやつにもダメ出しばかりで、ツバまで吐いた。

「ポーポーだ？ ヒラヤーチーだ？ いまどきダセーんだよ！ チッ！」

サイテーサイアクな、オワったやつだ。

昔むかしのこともゴツチャになって心臓しんぞうもバクバクして、体からだじゅうブルブルふるえてきた。

「そんなにくやしかった？ コーちゃんの弁当べんとうがそんなにうらやましかった？」

水みずしぶきのはじけるなか、ぬれるのもかまわないばあちゃんの手てがぼくの顔かおをなでた。

「この次つぎはスーパ―のものにするさあ。だからもう、きょうのことは忘れてねえ」

ポンポンとぼくの肩かたに手てを当てたばあちゃんはまた、ヒザをいたわらる



ように歩きはじめた。

オレンジのカサがゆるい坂を下って、だんだん小さくなっていく。

ぼくは取り残されたようにただボー然と立ち尽くした。

「なに言ってるんだよ！ ダメだよ！」

突然、背中にビリビリッと電気が走った。

「ちがうってばあ！」

サンドイッチなんかうらやましいもんか。

鼻の奥がツーンと頭の中を突き抜けた。

「弁当作ってくれなきやイヤだからな！」

ぼくはカサを投げだして、雨を振り払うように、ばあちゃんをめが

けてダツシュした。

「・・・じゃないと・・・絶好だからなっ！」

びしょぬれになってわめいた。ばあちゃんの腰にしがみついて、ワ  
ンワン泣いた。

五年生にもなって、男がチョウカツコ悪いと思っただけれど。ばあ  
ちゃんまで余計にぬらしてしまおうと思っただけれど。

そんなことはもうどうでもよくなっていた。

割れそうにパンパンになった頭の中では、ぼくの弁当とコータの  
カラフルなサンドイッチが入れ代わり立ち代わり、ビデオの早送りの  
ようにザーザーと回りはじめた。

ばあちゃんつくの作るものはそんなじよそこらのものとは数段すうだんも違ちがう。

別格べっかくでピカイチだ。

きょうの弁当べんとうもぼくの好きなチキンのから揚げあとのりまきだった。

おいしいはずだった。

ジジークさいもんか。なにがシーミーだ。

だったら、言いわせてもらうけど、サンドイッチのほうがよっぽどブリッコじゃないか。

ひっくり返かえしたコータが、絶対ぜったい、許ゆるせない。

あざ笑わらったコータが、クソ、許ゆるせない。

あいつだけはいつも野放のばなしにされている。

ぼくだけが最初さいしよからワルモノと決めつけられた。ぼくだけが一方いっぽう的に責められた。

ばあちゃんを呼び出されたのもぼくだけ。

スジ違いちがの見当けんとう違いだ。明らかにオカシイ。

きつちりとカタもつけなかった。

どうでもいいように片付かたづけられた。

どうしてもガッテンがいかない。

本当ほんとうのことことも知らない保健室ほけんしつの先生せんせいまで、あいつのカタかたを持った。

頭あたまごなしだった。

どれもこれも、めっちゃや、ハラが立つ。

けれど、ガンと立ち向かえなかった。

面と向かって言い返せなかった。

コータのしわざにガマンできなかった。

くやしくて、なさけなくて、堪えきれなくなつて、さつきよりも

つとぎゆうぎゆうと、ばあちゃんの腰にしがみついた。

ヒザのことも忘れるくらいしがみついた。

もつとワンワン泣いた。思いきり泣いた。

どれくらいそうしていたんだろう。

ちからが底をついたようにふにやふにやつと、体の芯がなえてい

くのを覚えた。

「はずかしいよ。ウリ、人が見ているサー。もう、いいよ。ん？  
ナーオ？」

抱えられるようにそろそろと引き離された。

気がつく、雨はすっかりあがって、ばあちゃんのぬれた顔はスポ

ットライトを当てたように陽をサンサンと浴びていた。

泣きはらした目にまぶしくはね返った。

目がチカチカ、しよぼしよぼする。

「弁当ぐらい作るさあ。もう泣くんじやないよ。ダアもう、男前

が台無しなとーん」

ばあちゃんはぼくのくしゃくしゃになった顔をこんどは両手で拭

うようになでた。

ばあちゃんの手のひらのぬくもりが一気に全身をかけめぐっていった。

目を上げてよく見ると、陽を受けたばあちゃんの顔がきらきらとかがやいていた。

(ばあちゃん、キレイだね)

そう言いたかったけど、ぼくはジツと見つめただけで、ニツと笑つてごまかした。

「ん？ なにかついてる？」

「ううーん。なににも・・・」

うろたえたたん、お腹なかの虫むしがキューツ、キュルルキュルと唄うたうよ  
うに鳴ないた。(了)

(下地しもじ 節子せつこ)